Japan Society of Obstetrics and Gynecology

301　IVF-ETにおける前核期胚移植の有用性の検討

福岡大
吉満陽孝、詠田由美、櫻井景紀、牧野康男、
白川光一

〔目的〕IVF-ETにおいて胚の体外培養における種々の因子が胚発生に重要な影響を与える。前核期胚の時期にETを行なう方法は、胚培養時間を短縮できる反面、子宮内膜における着床時期とのズレが問題となる。本研究では培養1日の前核期胚と培養2日の分割胚でのETにおける妊娠・着床率について比較検討した。〔方法〕1990年9月から1992年9月までの間に、当科においてIVF-ETを受けた66例（卵管性不妊41例、男性不妊13例、機能性不妊12例）を対象とした。全例GnRHアナログ併用hMGによる卵胞刺激後、超音波ガイド下に採卵した。また採卵時に子宮内膜の厚さを計測した。媒精後、ETは翌日の受精確認後に前核期胚（PN群）または翌々日に2～6分割胚（CL群）で行ない、両者における治療成績を比較した。〔成績〕120周期の採卵を行ない、91周期にETを行った。PN群（44周期）では平均移植胚数が2.8±0.9個で12周期（27.3％）の妊娠が、CL群（47周期）では平均移植胚数が3.0±0.8個で9周期（19.1％）の妊娠が成立し、両者に有意差はなかった。また着床率（GS数／移植胚数）の検討では、PN群で11.4％となり、CL群の8.5％と比較しても有意差がなかった。しかし、PN群での妊娠例はすべて子宮内膜の厚さが9㎜以上であり、8㎜以下での妊娠例5例はすべてCL群であった。〔結論〕hMGに対する子宮内膜の反応が良い例では、前核期胚でのETは分割胚と比較しても着床率は良好であり、胚の体外培養時間を短縮できる前核期胚移植は有用な方法と思われた。

302　体外受精ー胚移植における妊娠成立に関与する諸因子の検討

愛知・成田病院
上條浩子，浅井正子，永田博仁，成田　収

〔目的〕体外受精ー胚移植法において、現在迄に幾多の技術的改良が行われたにもかかわらず、妊娠率について必ずしも満足すべき成績が得られていない。胚移植後の妊娠成立に関与する因子を検索することを目的として今回の研究を行った。
〔方法〕対象は1991年9月より1年間に当院で子宮内胚移植をおこなった120症例139周期である。各周期につき年令、卵巣の反応性（E_2値）、媒精卵数あたりの受精率、培養液Lot、形態的移植胚の評価、および経膣超音波下に測定した子宮内膜の厚さを求め、対胚移植周期妊娠率（PR）を比較した。〔成績〕①年令によるPRは、30歳未満48％，30～34歳42％，35～39歳30％，40歳以上18％と、40歳以上で低かった。②E_2が1000pg/ml未満で37％、1000～4000 pg/mlで45％のPRに比べ、4000pg/ml以上では22％と低かった。③受精率＜40，40～60，60～80，80～100％におけるPRは、各々26，28，48，45％であり、受精率60％以上で良好な成績であった。④培養液Lot番号により、PRは最低9％から最高48％の変動がみられた。⑤各移植胚を顕微鏡下に観察し、3～15点に採点した。各周期における最高の胚スコアーでPRを比較すると、8点以下19％，9～12点34％，13点以上67％と、13点以上の胚を移植した周期では有意に高いPRを得た。⑥子宮内膜の厚さ8～12mm，13mm以上のPRは38，58％と有意差はないが、8mm未満の15周期からは1例(7％)の妊娠を得たのみであった。〔結論〕胚移植後の妊娠成立に関し、培養液、受精率、および移植胚の形態的評価が密接な関係を示し、また年令40歳以上、子宮内膜の厚さ8mm未満、卵巣の過剰反応が妊娠率低下に影響していることが示唆された。

NII-Electronic Library Service